

遺児ら 前を向いて

東日本大震災 5年

東日本大震災で被災した若手、宮城、福島、福島の三県では、千五百人を超え子どもたちが、両親を亡くした「孤児」、父親か母親を亡くした「遺児」になった。あれから五年、悲しみは消えない。それでも、前へと歩みだそうとしている若者がいる。
(武藤周吉、相坂穂) 〓亡き祖父を思ふ〓 〇・11 〇面



後悔乗り越え体験談

「どれだけ時間がたって、自分のせいで母が死んだという思いは消えない。でも、そのせいで立ち止まっていたはいけません」。津波で母親を失った仙台市の佐藤迅さん(20)は、五年がたち、やっとその思えるようになった。

あの日、母の道子さん(当時20)が掛けるのをやめたのは、中学卒業を控えた佐藤さんの体調がすぐれず、学校を休んだからだ。だが、午後には回復し、三つ上の姉と外出。そこへ地震が起きた。家に戻ったが、母の姿はない。高

台に逃げると街を津波が襲うのが見えた。母は友人らと避難中に津波にのまれて、その後で知った。「お母さんが死んだのは自分のせいだ。ごめんね、ごめんね」。母と行くはずだった高校入試の合格発表で涙がこぼれた。気丈に振舞っていた父が深夜、母の遺影に向かって何かを話し掛ける姿を見て、「取り返しつかないことをした」と、さうに悔いた。

高校では、家族を震災で失った友人は、ほとんどいなかった。「周り自分と違わない。体験を話せばひかれる」と口をつぐんだ。転機は高三の夏。震災遺児らを支援する一般財団法人「教育支援クローバル基金・ビーン・ドットコム」が企画した米国への短期滞在に参加した。現地の人とバーベキュー中、体験を語るよう促された。



更地になった自宅跡で母への思いを語る佐藤迅さん(仙台市宮城野区)

外出やめた母犠牲 佐藤迅さん(20)

自分の思いを全て語るの最初は初めてだった。みんな涙を流しながら聞き入り、「何かできることはないか」と尋ねてきた。すると、言葉が口をついて出た。「ただ、知ってほしい」。本当の自分の思いに気がついた。それから、講演を頼まれれば引き受け、友人にも自らの体験を語っていた。つらいこと、悲しいことがあると、更地になった自宅の跡地に自転車走り回し、手を合わせる。昨年三月、いつものように報告すると、「知ってるよ」と母の声が聞こえた気がした。今は、地域の復興や防災に携わる公務員を目指し、専門学校で学んでいる。「つらい経験を自分だからこぞできることがあるはず」と思っている。